セーヌ川も里川だった

京都精華大学 教授・滋賀県立 琵琶湖博物館 研究顧問
水と文化研究会 世話役・子どもと川とまちのフォーラム 代表
嘉田 由紀子

里川を考える時の三つの「距離」

私は琵琶湖研究など、どちらかというと普段は、農村を中心に歩いており、また国際的にもアフリカなど途上国問題等を専門にしております。今回はコルバンさんもお越しいただいておりますので、セーヌ川のお話も含めてさせていただきます。今回、敢えてこのようなテーマを選んだのは、どうも日本の 100 年の近代化の中で、技術者、行政、あるいは住民も、水や川や環境に対して勘違いをしていたのではないだろうかということが大変気になっているからです。先ほど高橋裕先生が、「近代化 100 年、欧米の技術を取り入れてきた。しかし日本人の感性が果たしてきちんとそこに入っていただろうか」というお話をされていましたが、私も同じような視点からこの「里川」ということを考えてみたいと思います。

里川を考えるには、人と自然の距離を考えなければいけないと思います。そこには、三種の距離があります。まず「物理的距離」は、物理量として表現される距離です。たとえば、水道の水源から蛇口まで何キロメートルという距離は、誰が測っても同じになる距離だと思います。

このような物理的な距離は、一般的に測れるのに対して、私たちは「社会的距離」を考えなければいけないと思います。それは、人と人の社会的関係に距離概念を見いだすものです。これはもとはフランスの社会学者のジンメルが一世紀前に表現した概念です。人と人との制度的仕組みとしてある「親近性」、これを私は「出来事の世界」と定義していますが、物事を決めていく時に誰が参画できるのか、あるいは人と自然の問題になると、そこを所有したり利用したりする制度はどうなっているのかというような問題が「社会的距離」だろうと思います。

また、3 点目の「心理的距離」は、コルバンさんの感性の歴史から言うと、感覚や精神として表現される親近性です。一種の心の世界と申し上げたらよろしいでしょうか。

この 3 つの距離は、あくまでも便宜的な区別です。私たちは普段、何かに親しく感じる、あるいは近いという時に、このように分析的には考えていないのですが、一体として表現されているものにいくつか切り口を入れる時に、この 3 点を大きな前提においておきたいと思います。

動脈と静脈をセットに考えた循環を

滋賀県では里川という言葉が日常的に使われている地域があります。里川は、「暮らしに近い川」です。例えば滋賀県守山市は、ホタルがたくさんいるので有名ですが、そこに金ガ森川（かねがもりがわ）という川があります。町の中を流れる農業用水路で、中世 13 世紀に開かれた人工的な用水路です。洗濯、風呂水汲み、ホタルが乱舞し、これを地元では「里中」あるいは「里中川」と呼んでいました。昭和 30 年代に変貌し、洗い場などの数も減ったのですが、ホタルを介して水辺の復活をしています。

また、マキノ町知内にある川を、地元の方は「前川」と呼んでいますが、「使い川」とも言っていました。村の中を流れる生活用水路ですが、ここでは飲み水も汲んでおり、子供も遊び、またビワマスやアユなどの魚類も琵琶湖から遡上し、魚もたくさんいた川です。実は、「里川」は造語ではなく、日本人の暮らし

の中に「里」というイメージがあり、そこに流れる人の暮らしと密着した川が里川だったということです。

水辺再生とは里川を取り戻すこと

次に、「社会的距離が近い」というのはどういうことか、というお話をさせていただきたいと思います。これは、地域社会が独自に水の量や、水の質を自主管理してきたということです。具体的には、有機物は「養い水」ということで、実はし尿さえ肥料化していました。

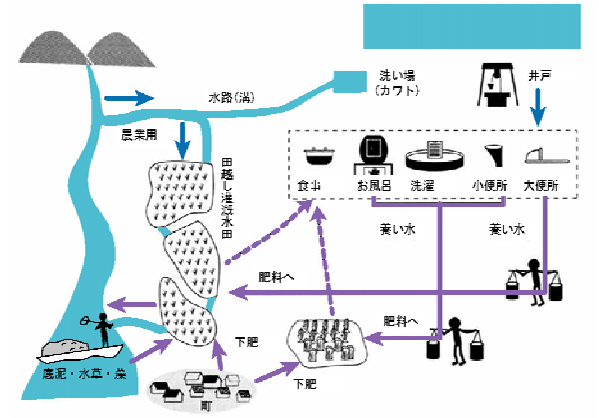
本日は、上水の後に、下水のお話をさせていただきますが、実は水の問題は飲み水だけではなく、私たちが出す下水、つまり静脈に深く関わりがあります。コンパクトシティを考える時には、動脈と静脈をセットに考えないと、トータルな関わりができないわけです。地域社会の中では、「わきまえ」として、「水はきれいに保つ」という仕組みがありました。

そのわきまえの具体的表現としては、例えば川には水神（スイジン）さんがいます。「川におしっこをしない。川におしっこをしたら、おちんちんが腫れる」とか「万が一、おしっこをしたら水神さんにあやまりましょう」ということを子供たちに言い伝えていました。農作物などの初物などはスイジンさんにお供えをし、水の清らかさへの信頼をもち続けていた川です。つまり、社会的距離が近く自主管理ができていたが故に、心理的距離として信頼が持てたので、先ほどのマキノ町の前川のように直接飲むことができたわけです。

その時代の近い水、里川の仕組みとして説明しますと、川から汲んだ水は、洗い場（カワト）や井戸から家庭に取り込まれ、それは「養い水」として畑や田んぼに行きます。実は、町の中の下肥（肥料として使用される人糞尿）も畑や田んぼの肥料として循環されていたわけです。ですから、直接家庭からの排水、あるいはし尿が川や水に出ることはありませんでした。

この水が流れ出た湖や川には栄養分が溜まりますが、その栄養分も水草や藻が取り込んでいました。結果として、例えば下流に住む人達もこの川の水を使えることができたわけです。つまり、水の循環がある集落、ある小さな領域でコンパクトになされていたということです。

近い水　里川のしくみ－昭和 30～40 年代



嘉田由紀子『環境社会学』岩波書店、2002

沖島のサンバシ（洗い場）の写真　1956 年（昭和 31）

前野隆資撮影・琵琶湖博物館提供

同じ場所、同じアングルで撮った 1997 年（平成 9）の写真。登場者も同じ方。

その時代の水のイメージを最もよく表しているのが、琵琶湖岸にある沖島の昭和31年の写真です。飲み水を汲み、洗い物をし、そして顔も洗うなど、暮らしの水はすべて自然の水を使っていました。これは、1 軒ではなく複数戸で使っていたのですが、隣近所が汚いことをするとなればこの水は飲めません。飲んでいたということは、この地域社会としてのわきまえがあり、自主管理ができていたということです。ただし、ここはきれいなものを洗うところですから、オムツなどは洗ってはいけないという仕組みはありました。

そして、現在の同じ場所、同じアングルの写真があります。また、写っている人も同じ人です。感性というものの調査は大変難しく、特に生活環境に関わる感性は、キレイや汚い等という単純な表現しかありません。そこで、十数年前からできるだけ昔の写真を集め、その同じ場所をその当事者の人達に語ってもらい、それによってこの時代の感性がどうセットとして、つまり記憶されているだけではなく、環境のセットとして成り立っていたのか、ということを研究したいと思ったわけです。実は、この手法の背景には、コルバンさんの本なり、アナール学派の影響を大変強く受けています。

信楽川　1953（昭和28）年

前野隆資撮影・琵琶湖博物館提供

同じ場所　1997（平成9）年

古谷桂信撮影・琵琶湖博物館提供

信楽川の同じ場所、同じアングルの写真を見ると、先ほどの里川と同じようなものが、今はコンクリートに変わっています。これは、近代工法の結果ですが、河川を作る人達には、ここに洗い場があり、おばあちゃん達が大根を洗っている場面は視野に入っていなかったわけです。

この川は洪水に遭います。ですから、洪水をどうにか押し込めなければいけないということで、洪水を一気に流す川を作ったのですが、ところが今子供たちは、やはり水辺に出たくて川に魚をつかみに行きます。

余呉川　1955 年（昭和 30）年

前野隆資撮影・琵琶湖博物館提供

同じ場所　1997（平成9）年

古谷桂信撮影・琵琶湖博物館提供

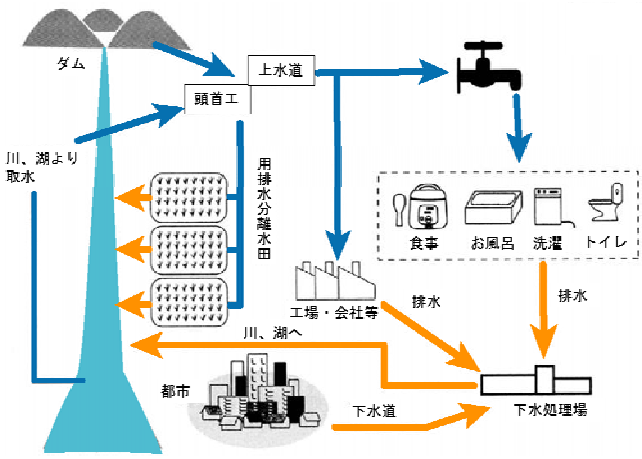
また、琵琶湖岸の余呉川の昭和30年と平成9年に撮った写真を見比べると、同じ場所、同じアングルだとは想像つかない程に変わっています。水上交通が、車に変わってきていて、地元の人も、だんだん車が増えてくるようになると、川が邪魔になってくる、その時に「川を細くして欲しい、洪水もあるので三面コンクリートにして欲しい」となります。ただし、地元の人たちはここまでコンクリートにしなくても良かったのに、と言っています。魚が全然いなくなり、寂しいという思いがあります。昭和30年の時代は、魚もいたしホタルもいたし、茶碗を洗ったらたくさん魚が寄ってきたというお話を聞きますので、やはり、魚がいなくなって寂しいという気持ちはあると思います。では、これからこの川をどうしたらいいのかということになりますが、これは河川法が改正されたこれからの課題です。

また、琵琶湖に注ぐ川、農業用水路などでクリークがあったわけですが、これらも埋め立てられました。その理由は、農業に使う水を、川ではなく、数キロ離れた琵琶湖の水を汲み上げて用いることで、農業を近代化しようという流れによるものです。これは、地元の人も「そうして欲しい」という願望があったわけですが、やはり寂しいというのが、現在の声です。

私達は、古い写真を持って、子供たちとお年寄りも一緒に現場を歩くことにしています。そうすると、今の子供たちが「えっ？ここで水を汲んでいたの？」というように、大変おもしろがります。地元の方と一緒に昔を辿りながら歩いています。

今の仕組みがどうなっているかというと、ある意味では、完全に水が使い捨てされているということです。上流にどんどんダムができます。先ほどコルバンさんがフランスの戦後復興の中で、ダムが繁栄の象徴だったとお話がありましたが、日本も同じです。佐久間ダム、黒四ダムなど、これによって日本経済が復興するという願望が特に昭和30年代には強くありました。そして上水道ができ生活は便利になりました。水洗便所が使えるようになりました。大便、小便を肥料に使うということもしなくて済み、下水処理場に最終的に集められ、川や大きな湖に流れます。

遠い水－上下水道の時代



嘉田由紀子『環境社会学』岩波書店、2002

しかし、この大きな川や湖の水を、私たちは、また自分達の口に戻さざるを得ません。これが人間の宿命です。水は上流から下流に、あるいは琵琶湖の場合は、下水を流したものを琵琶湖からまた上水に汲み上げています。このような循環は、大きなところではなされていますが、私たちの目に見えていませんし、日常の生活の意識にもありません。これは、行政の専門家に任せておいた方がいいと、私たちも関心を失いつつあるわけです。これは地理的距離の遠さが、社会的距離をはなし、心理的に水を人びとのココロから離してきたプロセスといえます。

このように、日本における水辺再生へのこだわりというものは、里川を取り戻すことが 1 つの方法であろうと思います。物理的・社会的・心理的距離という 3 つの距離がどんどん拡大してしまったのですが、今、社会的距離を縮める動きや心理的距離を縮める動きが始まっています。住民参加、地域自治の動き、また心理的距離を縮める水辺再生などの運動が、どういう方向にいくのだろうかということを考えていきたいと思います。

セーヌ川と人々の暮らし

それを考えるにあたり、今、世界中のさまざまな地域の水と人との関わりを、古い写真と今の写真をもとにインタビューを行っていますが、今日はセーヌ川だけをご紹介します。というのは、日本の水の近代化の成果の一つである上下水道システムは、フランスをモデルにしているからです。この近代化のプロセスでの水環境認識の変化を調べています。

パリの上水の歴史とセーヌ川は、かつては直接飲用水を使っていたのですが、17～18 世紀以降、上流から湧き水を汲むことが可能になりました。特に、知事オスマン（1809～91）によるパリ改革の時には、上流 50～60 キロの遠隔地の水源を確保し、各戸給水、今でいう水道が入ってくるわけです。一方、この頃から、レマン湖からボトル水が販売されるようになります。つまり、蛇口の水は飲めないという伝統があったわけで、現在もボトル水への信頼は高く、水道水は直接飲まないということが、社会的通念です。今のパリの水源は湧き水 60%、濾過水 40%です。

パリの下水道は、し尿を排除する思想から出ています。コルバンさんの著書『においの歴史』の中にありますが、日本のようにし尿を再利用する仕組みがなかったので、「し尿を排除する」という思想が生まれたわけですが、日本人はし尿を利用する文化を持っているにも拘わらず、し尿を排除する思想を無前提で受け入れ下水道を入れてしまったという文化的ずれというものがあると思います。

100 年前の写真をいくつか見ると、水売りがいてセーヌ川にはペットや馬が泳ぐということがありました。また、市場があった場所は、今は道路になっています。また、洗濯場があった所が、道路になり、子供たちが遊んでいたベルシー橋も、今では子供の姿は見えません。

ベルシー橋 1911 年

ベルシー橋 2000 年

2003 年の夏、アンケートをパリビーチ（人工的な砂浜）で行いました。パリにビーチが人工的に作られるということ自体が、1 つの流れを表していると思うのですが、ここの人たちに 100 年前の写真をお見せし、「今、セーヌ川で自分は泳ぐことができるか？」と聞きました。合計40名の方に2003年8月に聞き取り調査をしました。圧倒的に多くの人が「泳げない」「汚い」「船が危ない」といいます。その中には、「シラク大統領が泳がない」という方が 3 名いました。「では、子供やペットを泳がせられるか？」と聞きましたら、「子供なんて到底泳がせられない」という人がほとんどで、「ペットも泳がせられない」と答えた人も半分いました。「では、洗濯はどうか？」と聞くと、60 歳以上の 3 人だけは OK で、ほかは NO でした。そして、「洪水が来ても川沿いに住むか？」という質問に対しては、「住み続ける」が 30 名で、「場所がいい」「洪水は毎年来るわけではないからいい」など、これは日本人とはかなり大きな違いがあります。

独自の文化に応じた水辺の復活を

日本は今、水辺再生の願望が復活しつつあります。例えば、吉野川などでは流域圏での住民による水の自主的管理への動きなども現れてきています。こうした動きにどう対するかを考える時に、例えばフランスにはフランスで別の感性があるわけで、日本はやはり土地に合った独自の方法を考えなければいけないだろうということです。近代 100 年は、ある意味「ヨーロッパを見習え」ということをしてきたわけですが、それぞれ独自の文化に従って、感性と水辺の復活をして欲しいと思います。

現在、世界中の 10 箇所以上で今昔写真による水辺変遷の調査をしています。そこからわかってくることの一つは、現在、先進国が途上国に上下水道システム導入しようという、いろいろな ODA 等の支援が行われようとしているのですが、そのことが地域の水文化の破壊をもたらしてしまうという問題をはらんでいるということです。コンパクトシティの国際的意味ということを論じるには、やはり途上国の思想の中から、それぞれの独自の文化を見ていかなければいけないだろうと思います。